2012.7.5 No.36

JADCI NEWS

In This Issue

会長巻頭言：国際比較生物学連合の設立を目指して
ISDCI 2012 開催間近
第 23 回学術集会報告
平成 23 年度　古田奨励賞受賞者挨拶
訃報：藤田恒夫先生

日本比較免疫学会　役員（2010.9～2012.8）

会長：吉田　彪（臨床パストラルケア教育研修センター）
副会長：川畑俊一郎（九州大学）
庶務・会計：中尾実樹（九州大学）、補助役員　杣本智軌（九州大学）
学術集会担当：中村弘明（東京歯科大学）、橋本香保子（千葉工業大学）
広報担当：飯島亮介（帝京大学）、広瀬裕一（琉球大学）
会計監査：和合治久（埼玉医科大学）、中西照幸（日本大学）

発行者：日本比較免疫学会長　吉田　彪
事務局：庶務担当　中尾実樹
住所　〒812-8581　福岡市東区箱崎 6-10-1
九州大学大学院農学研究院　水族生化学研究室内
事務局 e-mail: jadci2office@gmail.com
電話　092-642-2894（ダイアルイン）　FAX　092-642-2897
郵便振替　口座番号　01730-9-80586
加入者名　日本比較免疫学会
表紙・ページのオリジナルデザイン：杣本　純

国際比較生物学連合の設立を目指して

日本比較免疫学会会長　　吉田　彪

日本比較免疫学会（JADCI）の創立のきっかけともなった国際比較免疫学会（ISDCI）の学術集会が日本で始めて開催されることになった。１９７６年に創立され以降３年に一度開催されて来たので今度福岡の会は第１２回ということになる。日本比較免疫学会は創立以来２４年で今年は第２４回大会となることは皆様ご存知の通りである。　私は ISCDI 会員ではないので、今回 ISDCI が日本の福岡で開催されるに至った詳しい経緯は知らないが、ISDCI の役員（Officer）であった中尾実樹九州大学教授（現在は President）が誘致され ISDCI での選挙で決定したとのことである。そこで問題になったのは第２４回 JADCI 学術集会と第１２回 ISDCI 学術集会を別々に開催するのかどうかということである。何故かというと ISDCI と JADCI が独立した学会だからである。　ある専門領域に関する学会が各国に存在するとき、それぞれが話し合って国際学会連合を作りその国際学術集会を開催するに当たってはどこかの国の学会が主催する。例えば、日本免疫学会と国際免疫学会連合との関係にみられる。こういう関係ならば、ISDCI を JADCI が誘致して JADCI が主催すべきであろう。 だが残念ながら ISDCI と JADCI は現在そのような関係にはない。世界で比較免疫学会の存在する国はあまり多くないと聞く。ちなみに、ISDCI は米国で創立されたにも関わらず米国比較免疫学会（未だに存在しない）と名乗らず ISDCI とした。

今さら何を言っているのだ、と言わないで欲しい。誤解しないで頂きたいのだが、学会間の縄張り争いではないのである。今後の比較免疫学の発展のために、比較免疫学会の存在しない各国に比較免疫学会や研究会の設立を今こそ働きかけるべきではないかと考えるのである。そのためには現在の ISDCI は International Federation of the Societies for Developmental & Comparative Immunology(仮称、IFSDCI)へと発展的解消をしてはどうだろうか。 IFSDCI が各国に呼びかけその国の比較免疫学会設立へと働きかけていくことである。まずは比較免疫学発祥の地米国でアメリカ比較免疫学会（ASDCI）が立ち上がることを期待している。

ともかく、既にお知らせしてあるように、今年度の第２４回 JADCI 学術集会は独自には開催せず、総会と比較三学会合同シンポジュームのみを主催し、JADCI は第１２回 ISDCI 学術集会を後援することとした。　JADCI 会員の皆様には比較免疫学の世界的発展のために、また将来の IFSDCI の成立を目指して、福岡で開催の ISDCI 学術集会に是非多数の方がご参加くださるように願っている。

さて、既に１年半以上前から、日本比較三学会を中心とした日本比較生物学会連合の設立を提案してきた。この学会ニュースレターにもその考え方を述べたことがある。　幾人かの方々から趣旨に賛同の意見を頂戴したが、私の努力も足りず、残念ながら今のところそ

の方向への具体的な動きは見られない。　しかし、上記の国際比較免疫学会連合への考え方からすれば、究極的には国際比較生物学会連合（International Federation of the Societies for Comparative Biology）の設立こそ将来目指すべきものではなかろうかと考える。　それは取りも直さず、学問・研究はある領域を深く掘り下げる事が大切であると同時に広い視野から関連領域との連携を強めることが大切だと考えるからである。

第 12 回国際比較免疫学会学術集会（ISDCI 2012)の開催

集会長　中尾実樹（九州大学大学院農学研究院）

いよいよ 7 月 9 日から、12th Congress of International Society of Developmental and Comparative Immunology（ISDCI 2012）が福岡にて始まります。昨年の学術集会における総会でお認めいただきたように、今回は、第 24 回 JADCI 学術集会を兼ね、さらに ISDCI 2012 の特別セッションとして、JADCI 主催による三学会合同シンポジウム「Recognition Mechanisms - Current Topics in Comparative Biology -」も開催されます。個人的には ISDCI に対して JADCI はじめ日本の比較生物学研究のアクティビティーの高さを示すよい機会であると考えております。

ISDCI 2012 のプログラム等の詳細は、ISDCI 2012 のホームページ（http://isdci12.net/）からダウンロードできます。また、ISDCI 2012 における JADCI 会員の発表を抜き出して編集したものを JADCI 第 24 回学術集会要旨集として皆様に配信したところです。

お陰様で ISDCI 2012 には、日本から約 70 名、海外から約 180 名の参加者をお迎えする予定です。一般演題としては口頭発表 131 演題とポスター発表 115 演題が発表され、活発な議論が期待されます。

九州では計画停電スケジュールが発表されましたが、幸い学会会場のヒルトン福岡シーホークホテルは通電継続型計画停電契約を結んだそうで、なんとか実際に電力が途絶えることは無さそうで、胸を撫で下ろしております。福岡では梅雨らしい雨が続き、学会期間中の天気も心配なところですが、湿っぽい天気を吹き飛ばす熱気ある学術集会になるよう微力を尽くしますので、よろしくお願い申しあげます。

「第２３回学術集会を終えて」

学術集会長　丸山　正
（独立行政法人海洋研究開発機構海洋生物多様性研究プログラム）

第２３回学術集会は８月２１日（日）から２３日（火）にかけて横浜市の独立行政法人海洋研究開発機構横浜研究所の三好記念講堂で開催されました。今年は、東日本大震災の影響で、当初は節電か場合によっては計画停電もあるかもしれない、と大変心配いたしましたが、エアコンも電力を気にせず働く条件のもとで開催することが出来ました。

今回は、特別講演（１題)、古田賞講演（１題)、シンポジウム（６題)、一般講演（３７題：無脊椎動物の生体防御、１２題；魚類の比較免疫学、１８題；哺乳類の比較免疫学、７題。但し、講演受付のミスにより印刷されたプログラムでは１題が欠落）の講演が行われました。参加者は８９名（その内、修士以下の学生１１名、博士課程８名）のご参加をいただきました。学生が多かったことは、修士以下の学生を無料にするという優遇策の効果ではないかと思われました。企業からも９社からポスター掲示（１社)、要旨集への広告（７社)、そして学術集会場での展示（２社)で協賛をいただきました。

今回の特別講演は発生学分野から名古屋大学大学院理学研究科附属臨海実験所所長の澤田均先生に「原索動物ホヤ類における自己と非自己の配偶子認識機構」というタイトルでお話しいただきました。発生学における配偶子相互作用（受精）はとても重要な問題で、そこにはアロ認識機構（自家不和合性）という免疫学と共通する分野が存在します。この分野では T.H.Morgan というショウジョウバエ遺伝学の巨人も研究していたという紹介もあり、我々聴衆も引き込まれて話を伺いました。マボヤの場合には、EGF 様リピート構造を有する卵黄膜タンパク質 HrC70 が卵成熟で卵黄膜に接着して自家不稔性を付与していることが示されました。しかし、同じホヤでもカタユウレイボヤの卵では、フィブリノーゲン様タンパク質の v-Thermis-A および-B が自己不稔性に関わり、一方の精子側では PDK1 様のチャンネルで s-Thermis-A および B がそれに関わっていることが示されました。さらに、これらの卵側と精子側のタンパク質は、それぞれ染色体のほぼ同じ遺伝子座に局在するなど興味深い研究が紹介されました。今後、当学会でも免疫学と発生学という異なる学問領域での自己・非自己認識をめぐる面白い議論が出来るようになることを期待したいと思います。

今年の古田賞は韓国プサン大学の Pusan National University の Lee Bok Luel 先生が受賞され、「Molecular activation and regulatory mechanisms of innate immune resonses after pathogenic microbe

challenges in insects」というタイトルのもと日本語で講演された。Lee 先生は日本でも研究されて、その中で Tenebrio molitor（チャイロコメノゴミムシダマシ)に出会い、この材料の長所を生かして研究されました。その研究から、バクテリアの Lys-type peptidoglylcan(PG) が PG recognition protein (PGRP)-SA/Gram-negative binding protein (GNBP1)複合体に結合して、三つのセリンプロテアーゼを介して pro-Spätzle を活性化することが明らかにしました。さらに、この複合体を経由する経路により、抗菌ペプチドの Tenecin-1 および -2 が生産されることも示されました。最近は、日本の産業総合研究所の深津博士らのグループと共同で、昆虫の共生と生体防御の関係を研究されているとのことでした。先生は若い研究者の発表にも多くの質問やアドバイスをされていました。先生は、日本と韓国の懸け橋になると同時に、共生研究と生体防御研究もつなげる重要な役割を果たされていると感じました。

シンポジウムは二つのミニシンポジウム（I. 深海生物の共生 II. 海洋無脊椎動物の比較免疫学）で構成しました。

深海生物の共生は、会場として用いた独立行政法人海洋研究開発機構で行われている海洋調査・研究から深海生物学をとりあげ、その中から免疫と関連の深い分野として無脊椎動物と微生物の間の共生に関わる研究を取り上げました。海洋研究開発機構の藤原先生には「化学合成共生システムの多様性と進化」、という題で深海の化学合成共生系を紹介していただき、鯨骨生物群集における研究から、イガイ類では浅海で生じた化学合成共生系が鯨の遺骸や沈木を介して、深海に進化的に広がっていったという仮説についても話していただきました。同機構の吉田先生他には「化学合成共生二枚貝の共生菌ゲノムの進化」、というタイトルで、細胞内共生が生じるとゲノムが縮小するメカニズムについて、長浜バイオ大学の中川先生他には「サツマハオリムシおよびヒゲムシ（環形動物）の巨大ヘモグロビンの生理機構と構造」についてお話しいただきました。サツマハオリムシのヘモグロビンは多量体となって分子量が３００万以上の巨大ヘモグロビンを形成することや、酸素結合が非常に高いことなどが話され、最近のＸ線結晶解析による分子構造との関連なども紹介されました。

海洋無脊椎動物の比較免疫学では東京海洋大学大学院の廣野先生に「クルマエビ類の自然免疫関連因子ノックダウンによる生体防御機構に関する研究」、東北大学大学院の伊藤先生に「生体防御関連因子からみる二枚貝の防御システム」そして、東京大学農学部附属水産実験所の田角先生に「ヴァージニアカキの免疫系を巧妙に利用する寄生虫の戦略」という題でお話しいただきました。廣野先生の講演では、RNA i 干渉による遺伝子の発現ノックダウンの手法がクルマエビでは非常に有効に働き、プロフェノールオキシダーゼ遺伝子ノックダウンではクルマエビは人為感染をしないでも斃死することが示されました。また、クルマエビゲノムに多数存するホワイトスポットウイルス（WSSV）様遺伝子をノックダウンすると、耐性が高まったり、逆に感受性が高まる例などの知見が紹介され、今後この分野が面白くなると感じられました。伊藤先生

の講演では自然免疫系の中で微生物の細胞壁を認識するβBGP(βグルカン認識タンパク質)や PGRP（ペプチドグリカン認識タンパク質）が、微生物を認識し、その後の抗菌あるいは殺菌反応などを引き起こしている可能性を示されていました。そのなかで二枚貝のPGRPにはリゾチーム様ドメインを有するものもあり、その場合には、直接的に抗菌活性を発現している可能性も示されました。田角先生の講演では、ヴァージニアカキに寄生するPerkinsus marinus が、この寄生虫が感染する際に宿主で発現が上昇し生体防御に関わると考えられるガレクチンの糖と同じ糖に結合することなどから、宿主の生体防御系を利用して感染する可能性があることが示されました。このような分野は今後、寄生虫や共生者と宿主との相互作用を考えるうえで大変重要であると考えられました。

今回のシンポジウムでは、発表演題が多かったために、１日目は１９時を少し過ぎるまで活発な討論が行われました。２日目も一般講演の後、古田賞講演、特別講演と大変熱気のあふれる講演と議論がされたあと、オークション、そして懇親会と盛り沢山の企画で、参加者はお疲れになったのではないかと思われますが、３日目のシンポジウムでも活発な議論が行われ、学術集会長としては、大変うれしく思いました。

なお、学生を含む若手研究者の一般演題から選考されて坂内英美さん（東京大学大学院博士課程３年）が発表された「鱗移植片の旧姓拒絶反応に関わるメダカ MHC 遺伝子の同定」が古田奨励賞を受賞されました。

３日目のシンポジウムで学会は終了しましたが、そのあと、海洋研究開発機構の横浜研究所（学術集会を開催した場所）と横須賀本部（深海調査船とその母船などの基地）の見学会をおこないました。普段あまり見る機会の少ない地球科学の展示装置や地球シミュレータと呼ばれる数年前には世界最速のスーパーコンピュータ（横浜研究所)、さらに有人深海調査船「しんかい６５００」や深海生物の飼育施設（横須賀本部）など、も見学していただき、好評でした。

今回は、学術集会に加えて、東日本大震災への義援金オークション、海洋研究開発機構の見学会と盛り沢山の内容で、会場では活発な議論と同時に、オークションの品物を介しての交流や、見学会での交流も盛んにおこなわれました。今回の学術集会では、海洋研究開発機構の支援部（４名）や海洋生物多様性研究プログラムの支援の方（３名)、および当機構で学ぶ幾つかの大学院に属する学生さん（４名）の協力の協力を得て、無事終了することができました。この紙面を借りて彼らの協力に感謝いたします。

JADCINEWSJADCINEWSJAD

古田奨励賞を受賞して

鱗移植片の急性拒絶反応に関わるメダカ MHC 遺伝子の同定

坂内 英美
東京大学大学院・理学系研究科・生物科学専攻

この度は、おもいがけず古田奨励賞をいただきとても驚きました。多くの方から評価いただけたことに感激しています。

急性拒絶反応の研究といえば、ほ乳類を用いた研究から得られた知見が他を圧倒しています。ほ乳類では、人の臓器移植やノックアウトマウスを用いた研究などから、MHC クラス I 分子とクラス II 分子の両方が急性拒絶反応の有無に直接関与しているとされています。ところがある時、CD8 T 細胞ではなく CD4 T 細胞が急性拒絶反応において中心的な役割を担っているとするノックアウトマウスを用いた論文を読み、以下のような疑問がわいてきました。細胞障害性の CD8 T 細胞が急性拒絶反応に必須ではないというのは本当だろうか。CD8 T 細胞を活性化する MHC クラス I 分子と CD４ T 細胞を活性化する MHC クラス II 分子は同等に急性拒絶反応の有無に重要なのだろうか。そうだとすると、いったいどのような経路がかかわっているのだろうか。遺伝子ノックアウト動物は生来の状態と異なる体内環境になっていることが考えられるので、これらの疑問を確かめるために、遺伝子改変をしていない個体で実験を行いたいと考えました。そこで、MHC 遺伝子が連鎖していない硬骨魚類を用いて、個々の MHC 遺伝子の急性拒絶反応への寄与を確かめる実験を行うことにしました。私の属する免疫分子進化学研究室においてメダカ（*Oryzias latipes*）の MHC 遺伝子の解析が進められていましたので、メダカの近交系を用いて鱗移植を行いました。鱗移植は、実体顕微鏡下で体長２センチのメダカの鱗をピンセットでつまんで抜いて挿すという微妙な加減を必要とするもので、かなりの集中を必要とし、目が非常に疲れましたが、もともとボトルシップ作りなどの細かい作業が好きでしたし、in vivo で免疫反応を扱えるやりがいのある実験でした。鱗移植における急性拒絶反応の有無と全 MHC 遺伝子型を解析した結果、メダカの鱗移植においては MHC クラス II 分子をコードする遺伝子は急性拒絶反応に直接関与しないという結果が得られました。ほ乳類では、急性拒絶反応には非自己の MHC クラス II 分子による CD4 T 細胞の活性化が中心的な役割を果たしているといわれていますから、メダカとほ乳類では急性拒絶反応のメカニズムが異なると考えられます。今後はこの結果が硬骨魚類に特有なものなのかどうか、また、ほ乳類とのどのよう

な違いによるものなのかを明らかにしていきたいと考えています。

子どもを３人出産したことで、研究者としては駆け出しの身でありながら、すでに世間的な若手研究者の基準からは年齢的にオーバーしてしまっている私には、今回の受賞はとても励みになりました。 研究と子育てとの両立に悩み、研究を続けていけるか、研究者としてやっていけるのかと不安を感じる毎日ですが、古田先生をはじめ、選考委員の先生方、会員のみなさまに背中を押していただけたように感じます。これからも研究に邁進し、古田奨励賞受賞者にふさわしい研究者に成長していきたいと思います。ありがとうございました。

訃報

２０１２年２月６日に、本学会会員の藤田恒夫先生がご逝去されました。藤田先生は、新潟大学名誉教授・「ミクロスコピア」編集長としてご活躍でした。ご冥福をお祈りいたします。

平成２３年度　日本比較免疫学会　総会議事録

開催日時：平成２３年８月２２日　１３：５０～１４：５０
場所：海洋開発機構　横浜研究所　本館３階中講堂
議長選出：吉田 彪 会長

Ⅰ．第２３回学術集会開催状況：丸山　正　集会長

事前申込者 68 名に＋αの参加者があり、一般講演も多数あってタイトなスケジュールになっている。シンポジウム・見学会も計画されている。3 日間よろしくお願いします、との挨拶。

II．報告事項

１．会務報告：中尾庶務会計担当役員

１）ニュース発行：秋に 1 回発行（JADCI News No.35,2010.12.15.）した。

２）会員名簿の整理と発行（H23 年度分）

①20 数名の幽霊会員（郵便とメールでの連絡が取れない会員）がいるので、現在元帳を整理中である。

②会員種別の把握のため、新規の学生入会者には、身分証明を提出してもらい、その情報を会員名簿原本に記載することとしたい。名簿への会員種別の記載も考えている。

③会員名簿原本を e-mail のアドレス帳に変更し、記録の一元化を図りたい。

２．国際比較生理生化学会（ICCPB2011)における比較免疫学シンポジウムの報告：中尾役員

下記の通り、国際比較生理生化学会（ICCPB2011)が開催され、比較生理生化学会からの要請により、中西委員、中尾委員の企画のもとに比較免疫学のシンポジウムを行った。JADCI からは倉田祥一朗、笠原正典、中西照幸、中尾実樹の 4 氏が発表し、「面白い内容である」との好評を得た。発表内容をまとめたレポートは比較生理生化学会のレターに寄稿中であるので、今後、皆様とその PDF 版を共有できるようにしたいと考えている。

日時：ICCPB の開催期間　2011 年 5 月 31 日～6 月 5 日
シンポジウム開催日時　6 月３日　14:15～16:45
会場：名古屋国際会議場
企画：中西照幸・中尾実樹

『Evolution and diversity of innate and adaptive immune systems』

1) Shoichiro Kurata (Tohoku Univ., Japan): A receptor guanylyl cyclase mediates humoral and cellular responses in Drosophila immunity

2) Masanori Kasahara (Hokkaido Univ., Japan): Structure and Function of Variable Lymphocyte Receptors: An Update

3) Miki Nakao (Kyushu Univ., Japan): Structural and functional diversity of the complement system, an innate immune factor, in fish

4)Teruyuki Nakanishi (Nihon Univ., Japan): Diversified isotypes of immune-related genes in teleost

なお、吉田会長から「上記の国際学会に参加・発表された４名のシンポジストの方々は、参加費と交通費を実費で払っての参加となっている。参加を要請され、当学会を代表して講演された状況を鑑み、それらの費用を学会費から出費したいと考えているので、ご承認いただきたい」以下の提案があり、会場からの異議はなく、承認された。

３．ＤＣＩ誌掲載の Conference Report：中尾役員

毎年、Conference Report を Developmental and Comparative Immunology(DCI)誌に寄稿している。22nd JADCI の Conference Report は、集会長であった川畑俊一郎先生が執筆され、DCI,35(6)に掲載済みである。DCI 誌に Online アクセスできない方は、中尾委員まで連絡いただければ対処したいとのこと。

４． ISDCI 2012 の開催について：中尾役員

ISDCI 2012 の開催について、ホームページを投影して説明がなされた。Local Organizing Committee や Plenary Speaker など、徐々に準備が進んでいるとのこと。

【ISDCI 2012 国際会議】

2012 年７月９日～１３日

福岡市　Hilton Fukuoka Sea Hawk Hotel にて

案内ホームページ：http://isdci12.net/

５．次期第 24 回学術集会（２０１２年度）：集会長：倉田祥一朗　（東北大学）

６．次次期　第 25 回学術集会：集会長　浅田伸彦（岡山理科大学）

予定通り行われるなら、よろしく、との挨拶。

なお、JADCI 第 24 回集会と ISDCI 国際会議との開催について、以下の討議がなされた。

吉田議長：第 24 回 JADCI（仙台）を、ISDCI 国際会議（福岡）の１ヶ月後に開催するのは難しいのでは？同時開催にしては？などの意見が役員会で出たが、結論に至っていない。総論賛成の役員もいるが、具体案が未定である。Local Committee で具体案を１～２週中に提案してほしいと、会長として申し渡してあるが、ここで総会参加の皆様のご意見をお伺いしたい。

古田会員：同時開催は反対、第 24 回集会は東北で倉田先生が担当すべきである。
本学会は、International な学会を JADCI として開催することが目的で創設されたのであって、JADCI は ISDCI の下部組織ではない。Cooper 氏から JADCI の History の speaker を依頼されたが、何で以前 中尾先生が話したことを、又、話さねばならないのか。

吉田議長：役員会にて、倉田先生から「自分が集会長として福岡で開催することは無理」との意見を聞いている。

中尾役員：ISDCI と JADCI 双方の会員になっているのは 25、6 人である。JADCI と ISDCI の両方に参加している人は 6 割ほどいるので、その方々のメリットを考えたい。同時開催は、JADCI と ISDCI の交流としてのメリットもある。

中西役員：ISDCI と JADCI は別の学会であるが、両方に参加する方の立場と開催側の苦労があると思われる。開催側としては、一般演題等を集める苦労（1 か月後の開催では集まりにくい）が考えられ、参加者側にとっては、福岡と仙台への旅費確保の苦労もある。ISDCI 会議の前か後ろに JADCI を福岡で開催するのも一案と思われる。

和合役員：JADCI 事務局長の中尾先生が ISDCI 国際会議を担当されることになるので、ここは柔軟に対応したほうがよい。個別に開催すると参加者側の苦労が考えられる。JADCI は集会の Abstract あるいは Conference Report を DCI 誌に掲載してきている経緯（付き合い）もあり、会則にも ISDCI との交流がうたわれているので、独立性を維持しながらも ISDCI 会議を支援すべきである。同時開催は、海外からの参加者にも JADCI を知ってもらう良い機会となる。

古田会員：仙台で同時開催してはどうか。

吉田議長：一両日中にメールでご意見をお寄せください。他にご意見は？

小林会員（杏林大）：私の経験談であるが、マラリアフォーラムにおいて、国際会議に結集して国内の会議を取りやめたことがあった。国際会議の中に国内会議を行うのは難しいことなので、JADCI 会員は ISDCI で発表をして、国際会議を盛

JADCINEWSJADCINEWSJAD

り上げるといった年にしてはどうか。

吉田議長：会費（参加費）の負担をどうするか、などの問題もある。

小林会員：アクティブに国内の学会（JADCI）に参加している人は国際会議（ISDCI）に参加したいと思はずである。自分も来年は ISDCI 国際会議に若い人を出したいと思っている。

吉田議長：メール、手紙等で是非ご意見をお寄せください。　（以上）

７．比較三学会合同シンポジウム：中村弘明学術集会担当役員

2011 年度の開催が ICCPB2011 のために延期され、比較免疫学会が当番学会として 2012 年度の第 24 回学術集会時に開催される予定であるが、ISDCI 会議の開催に伴って、開催の変更があるかもしれない。テーマ、演者等で、皆様のご協力を期待している。

III. 審議・承認事項

１．会計報告と承認：中尾庶務会計担当役員、杣本庶務会計担当補助役員

１）Ｈ２２年度決算報告

平成 21 年度の予算の内訳・決済報告が、次のようにスクリーンで示された。

1. H22 年度予算		
収入		¥1,792,174
支出(見込み)		¥1,792,174
2. H22 年度決算報告		
収入		¥1,166,399
支出		¥449,401
H23 年度への繰り越し		¥716,938
収入の主な内訳；	前年度より繰り越し	¥937,174
	会費	¥229,000
	利息	¥165
支出の主な内訳；	振込送金手数料	¥1,050
	学術集会講演要旨・ポスター印刷経費	¥194,250
	学術集会補助金	¥100,000
	役員会旅費補助	¥27,200
	比較３学会旅費	¥45,580
	通信費(メール便、その他郵便料)	¥42,163
	文具	¥8,927
	会議費	¥30,231

会費を納めていない会員が半数以上いるため、今年度中に督促状を未納入会員に送付する予定であることを伝えた。この内容に関して、質疑はなく総会で承認された。

２）Ｈ２２年度会計監査報告

中西照幸会計監査役員と和合治久役員の監査の結果、会計は正確、適正に処理していると報告された。この内容に質疑はなく総会で承認された。

３）Ｈ２３年度予算案

Ｈ２３年度の予算案の掲示が次のようにスクリーンで示された。

収入	¥1,434,938
支出	¥1,434,938
収入の主な内訳；前年度より繰り越し	¥716,938
会費(一般 140 名、学生 6 名)	¥718,000
収入の主な内訳；振替口座手数料・振り込み手数料	¥10,000
第 24 回学術集会講演要旨印刷経費	¥200,000
学術集会補助金	¥100,000
通信費・配送費	¥100,000
文具代	¥10,000
雑費	¥100,000
予備費	¥100,000
次年度への繰り越し	¥814,938

来年度の学術集会の開催形式ついては、未だ不透明であるが、例年に従い支出額を算出した。この内容に関して、質疑はなく総会で承認された。

２．比較三学会連合体の設立：吉田議長

JDCI News No.35 でも書いたことであるが、会の活性化の一案として、比較 3 学会の連合体設立の提案を行った。アメリカの FASEB をモデルにして、3 学会が独立した学会でありながら同時に学術集会を開催するといった案。他の 2 学会の会長にも問い合わせているが、まだ返事はない（会長人事の変わり目等の理由もあり）。皆様のご意見をメールでお寄せください。

第 24 回 JADCI 学術集会（２０１２）開催要領　2011.8.30

（総会での議論を踏まえ、下記のように役員会で決定されました。）

第 24 回 JADCI 学術集会は、第 12 回 ISDCI 国際会議と同日（2012.7.9～13）・同場所（ヒルトン福岡シーホークホテル）での共同開催とする。

JADCI の行事として下記を行なう。

１．　JADCI 総会（可能ならそれに先だって役員会）

　＊日時（案）：7 月 9 日午前

２．　比較三学会合同シンポジウム（約２時間）：ISDCI の Special Session として Comparative Biology Symposium（仮題）として開催する。これは ISDCI 国際会議の他のセッションと並行して開催される。

　＊日時（案）：7 月 9 日午後

３．　JADCI 会員の一般演題は、すべて ISDCI 国際会議の適切なセッションにおける口頭あるいはポスター発表とする。

４．上記２.および３.はすべて英語による発表とし、英文 Abstract を ISDCI 国際会議に投稿する。同時に、２.および３.の和文要旨も作成して JADCI に提出していただき、英・和文の要旨を編集・製本して、第２４回 JADCI 学術集会講演要旨集を作成し、JADCI 会員に例年通り配布する。

備考

１．第 12 回 ISDCI 国際会議に参加・発表することで、第 24 回 JADCI 学術集会に参加し、研究発表したこととする。JADCI としての参加費は徴収しない。ISDCI 国際会議の参加費について、JADCI 会員への割引ができるかどうか、できるとしてどの程度の額かについては、さらに検討を要する。

２．古田賞は募集するが、受賞講演は行なわない。奨励賞は選考しない、あるいはポスター発表だけを対象にベストポスター賞として位置づける。(蛇足ながら、ISDCI 国際会議は独自に優秀発表を表彰すると思います。)

３．比較三学会合同シンポにおける他学会からのシンポジストには、これまでと同様に JADCI から講演謝礼を支出する。合同シンポ当日のみの参加の場合は、ISDCI 国際会議参加費は課金しない。他の日程にも参加される場合は、一般の ISDCI 国際会議参加者と同様に参加費を支払っていただく。

４．上記のような開催形態をもって、第 12 回 ISDCI 国際会議を、「JADCI との共同開催（hosted jointly with JADCI)」とみなす。

事務局より

＊所属・住所が変わったら至急ご連絡を！

News 等の送付に宅配便を利用しております。転送ができませんので、宛先となる所属や住所に変更が生じた場合には、学会事務局まで至急ご連絡ください。e-mail か Fax でお願いいたします。書式は特にありませんが、下記の情報をいただけますと助かります。

氏名、住所、所属、電話／FAX 番号、メールアドレス

＊News への寄稿を募集しております。

エッセイ、学会参加記、JADCI へのご意見・ご提言などをお待ちいたします。庶務担当中尾までお寄せ下さい。また、News を充実させるため、その構成や編集についてのご意見も歓迎いたします。

様式／書式につきましては、事務局までメールでお問い合わせください。

＊新会員の入会を歓迎いたします。

会員の皆様のお近くに、比較免疫学にご興味の方がおられましたら、本学会への入会をぜひともお薦めいただけますようお願い申し上げます。

JADCI 入会の手続き

電子メールで下記の情報を事務局までお知らせ下さい。
折り返し、年会費（5000 円、入会金なし）の振替用紙を郵送いたします。

メールアドレス　jadci2office@gmail.com

1．氏名
2．氏名（ローマ字）
3．所属
4．連絡先（所属先あるいは自宅かを明記して下さい。）
　郵便番号・住所・電話／FAX 番号
5．e-mai address
6．専門分野